

# 大学の初修中国語教育におけるブレンド型授業導入の成果と課題

## —対面授業との比較から—

許挺傑

(大分県立芸術文化短期大学)

### 1. はじめに

本稿は 2020 年のコロナ禍という環境の中で行った大学の初修中国語教育におけるブレンド型授業の実践報告である。対面授業時（2018 年度、2019 年度）の成績や授業評価アンケートの結果と比較し、ブレンド型授業の成果と課題について報告し、大学の初修中国語教育におけるブレンド型授業の展開の一助にしたい。

### 2. 先行研究

李（2014）では、授業展開の側面からブレンド型授業を 3 つに分類している。タイプ 1 は「授業外ブレンド型」と呼ばれ、教室での対面授業と授業外の e-learning をブレンドしたものである。このタイプは様々な教育分野で比較的多く見られる。タイプ 2 は「一単位授業枠内ブレンド型」である。代表的な研究例は藤代（2009）、藤代・宮地（2009）等がある。タイプ 3 は「独立交互ブレンド型」と呼ばれ、e-learning と教室での対面授業を交代に行う形式である。代表的な研究例は向後他（2012）がある。

日本の中国語教育におけるブレンド型授業の実践は、杉江・三ツ木（2015）、杉江（2017）、趙他（2012、2013）などがある。杉江・三ツ木（2015）、杉江（2017）は「遠隔交流を活用したブレンド型学習モデル」を採用した高校の中国語教育での実践である。趙他（2012、2013）は「3 段階ブレンディッドラーニング」モデルを導入した大学の初修中国語教育での実践である。「3 段階」とは「1.対面授業による新しい学習」、「2.授業後の e ラーニング」、「3.次回の授業によるテスト・発展学習」のことであり、このブレンド型授業はタイプ 1 の「授業外ブレンド型」に属すると言える。

上記の研究はどちらも中国語教育におけるブレンド型授業の導入に対して非常に有益なヒントを与えてくれる。しかし、大学の初修中国語教育に限って見れば、趙他（2012、2013）による「授業外ブレンド型」の実践はあるが、「一単位授業枠内ブレンド型」と「独立交互ブレンド型」の実践が管見の限り、確認できなかった。ブレンド型授業の形態について、学習の成立を保障するベストな組み合わせが決まっているわけではなく、学習段階や教科の特性に応じて有効な組み合わせ方を検討する必要がある（藤代・宮地 2009）。このことから、今後、大学の初修中国語教育におけるブレンド型授業をさらに展開させていくためには、タイプ 1 について更なる実践と検証を行っていくと同時に、タイプ 2、3 についての新規実践を試みる価値は十分にあると考えられる。

本研究はタイプ 3 の「独立交互ブレンド型」の実践である。本来対面授業で行う単語や文法などの基礎知識の学習を動画によるオンデマンド型授業（授業外ではなく、正規授業の 1 コマ）に置き換え、Zoom による対面授業（2 コマ）では、テストやクイズ等による知識の確認、知識の定着と活用を促す各種の学習行動を中心に行う。

### 3. ブレンド型授業の概要

実践したブレンド型授業は、2020年度後期筆者が担当したO大学の初修中国語の授業、中国語Ib(週に1コマ)という授業である。前期に中国語Ia(週に1コマ)という授業を開講しており、中国語Ibはその続きである。大学の初修中国語の授業ということで毎年多く(60名~100名)の学生が受講している。大学では学生を2クラスに分け、それぞれのクラスの学生に対して、一人の教員が同じ内容を1回ずつ教授する形で対応している。授業では『中国語はじめの一步』という教科書を使用し、教科書の第4課~第8課までの内容を扱った。教科書1課の内容につき、3コマの授業を実施した。1コマ目は、その課で学ぶ単語や会話、文法、練習等の内容を教員自作の動画(60分程度)にまとめ、その動画を授業時間中に視聴し、その後締め切りまでに課題を提出させる形で行った。各課の動画の長さとは内容は表1の通りである。

	単語と例文(分)	会話(分)	文法と練習(分)	課題と来週予定(分)	計(分)
第4課	19	4	34	2	59
第5課	21	4	31	2	58
第6課	17	4	23	2	46
第7課	24	6	33	2	65
第8課	24	4	34	9	71

表1.オンデマンド型学習用の動画の長さとは内容

動画は筆者のYouTubeチャンネルにアップしており、学生にはそれぞれの授業開始約10分前に、大学の学習支援システムであるC-learningを通じて動画のリンクを知らせている。動画の元となるPPT資料は、授業開始前日までにC-learningの教材倉庫にアップしておき、学生が閲覧できるようにしている。学生は授業時間内に動画を視聴し、指定時間内に出席コードをC-learningの出席画面に入力する必要がある。出席コードや課題内容の確認等、すべて動画視聴が前提となっているため、正規の授業時間内での動画視聴率と質を保証している。なお、学生には出席率や課題の提出率等もすべて成績評価の対象になることをガイダンスの際に伝えている。

Zoomによる対面授業(全体の2・3コマ目)は、①動画で学習した中国語の基礎知識の定着度を確認する活動(課題のフィードバック、単語のディクテーション、単語や会話の発音チェック、ペアによる会話練習)、②基礎知識を使って、自分のことを表現するための応用練習などの活動(ペアによる会話練習、グループによる作文のプレゼン)を中心に進めている。また、ブレイクアウトルームや投票などのZoomの機能を積極的に利用し、授業における学生の参加度を高められるよう心掛けている。

### 4. 対面授業との比較

#### 4.1 期末成績の年度別比較

期末試験は、2018年度・2019年度・2020年度どちらも大学の教室で実施した。対面授業とブレンド型授業で使用した教科書はすべて同じで、期末試験で用いたテストも同じ形式と内容であった。各年度の期末テストの成績(平均点:85.6(2018,n=87,SD=10.59)、82.6(2019,n=55,SD=10.23)、85.3(2020,n=62,SD=10.97))について、1要因の分散分析を

行った結果、年度間に有意差がなかった ( $F(2,201)=1.39, ns$ )。このことから、通常の対面授業と比べ、コロナ禍で導入した今回のようなブレンド型授業でも、同程度の学習効果を得られることが明らかになった。

## 4.2 授業評価アンケートの年度別比較

授業評価アンケートは、「授業の内容」、「授業の方法」、「学生自身の取り組み」の3カテゴリから構成されており、各カテゴリにおいて、5項目の設問（いずれも5段階評価）が設けられている。アンケートは、対面授業では15回目の授業時に教室で、ブレンド型授業では15回目の授業時にオンラインで実施した。年度間の差を明らかにするために、各項目の評価得点について、1要因の分散分析を行った。有意差が確認できたものについては、テューキーのHSD検定で多重比較を行った（表2）。

項目	2018	2019	2020	1 要因の分散分析 HSD 検定による多重比較	
	n=68 M(SD)	n=46 M(SD)	n=62 M(SD)		
授業の内容	1.授業の内容は十分理解できるものであった。	4.63 (0.51)	4.74 (0.49)	4.55 (0.50)	有意差なし
	2.授業の内容は興味あるものであった	4.60 (0.55)	4.78 (0.41)	4.48 (0.69)	・ $F(2,173)=3.54, p<.05$ ・ <b>2019&gt;2020</b> , $p<.05$
	3.授業を通して知識または技能が得られた	4.66 (0.47)	4.76 (0.47)	4.65 (0.54)	有意差なし
	4.授業の内容は自分のためになった	4.68 (0.50)	4.80 (0.45)	4.69 (0.53)	有意差なし
	5.授業の内容は全体的に満足できるものだった	4.74 (0.47)	4.80 (0.45)	4.65 (0.51)	有意差なし
授業の方法	6.先生の説明は丁寧で分かりやすかった	4.85 (0.35)	4.93 (0.25)	4.73 (0.48)	・ $F(2,173)=4.09, p<.05$ ・ <b>2019&gt;2020</b> , $p<.05$
	7.先生の声は明瞭で聞き取りやすかった	4.87 (0.38)	4.87 (0.34)	4.77 (0.42)	有意差なし
	8.先生に学生の関心をひきつける工夫があった	4.72 (0.51)	4.78 (0.41)	4.39 (0.66)	・ $F(2,173)=8.72, p<.01$ ・ <b>2018&gt;2020</b> , $p<.05$ ・ <b>2019&gt;2020</b> , $p<.05$
	9.先生は学生の質問や発言を促す工夫をしていた	4.81 (0.46)	4.87 (0.34)	4.65 (0.48)	・ $F(2,173)=3.88, p<.05$ ・ <b>2019&gt;2020</b> , $p<.05$
	10.教材の提示方法は適切で分かりやすかった	4.81 (0.39)	4.87 (0.34)	4.63 (0.48)	・ $F(2,173)=5.09, p<.01$ ・ <b>2018&gt;2020</b> , $p<.05$ ・ <b>2019&gt;2020</b> , $p<.05$

学生 の 取 り 組 み	11.先生の話から要点 をつかもうと努力した	4.51 (0.61)	4.74 (0.44)	4.48 (0.56)	・ F(2,173)=3.20, p<.05 ・ 2019>2020, p<.05
	12.予習・復習（個人練 習も）に意欲的に取り 組んだ	4.32 (0.65)	4.41 (0.65)	4.37 (0.79)	有意差なし
	13.授業には積極的な 態度で参加した	4.51 (0.63)	4.70 (0.55)	4.50 (0.74)	有意差なし
	14.遅刻や欠席をしな いように心がけた	4.46 (0.74)	4.37 (0.89)	4.61 (0.66)	有意差なし
	15.私語などで人に迷 惑をかけないように心 がけた	4.57 (0.60)	4.78 (0.46)	4.84 (0.37)	・ F(2,173)=5.07, p<.01 ・ 2018<2020, p<.05

表 2.対面授業とブレンド型授業の授業評価アンケートの比較

「授業の内容」1項目、「学生の取り組み」1項目、「授業の方法」4項目において、ブレンド型授業の評価得点が有意に低かった。特に「授業の方法」5項目のうち、4項目が対面授業の評価得点を下回っていることから、今回のようなオンライン上のブレンド型授業の実施に際し、「授業の方法」において、いかに学生たちの満足度を上げていくかが課題であることが明らかになった。

#### 4.3 授業形態についての自由記述アンケート

ブレンド型授業という授業形態についての自由記述アンケート（このような授業の進め方について自由に意見を述べてください）は、通常の授業評価アンケートと同じタイミングで実施した。受講生 62 名全員から意見を得ることができた。学生の意見集約を行うに際して、恣意性を避けるために、テキストマイニングのフリーソフトである KH Coder の「共起ネットワーク」の機能で学生の意見の集約を試みた（図 1）。

今回実施したブレンド型授業について、全体の進め方（①③）や、動画によるオンデマンド型授業と Zoom による対面授業を連携させ、ブレンドした点（②）はもちろん、中でも、中国語の基礎知識の学習を動画によるオンデマンド型授業（授業外ではなく、正規の授業の 1 コマ）に置き換えるという点（④⑤⑥）について、積極的なコメントが多く、学生からも大いに歓迎されていることが明らかになった。このことから、今回のような授業形態は、学生からも受け入れられる授業形態であると言える。

#### 5. 今後の課題

- 1) 授業評価アンケートで明らかになった課題を改善すべく、更なる工夫を行う。
- 2) 今後、「Zoom による対面授業」を通常の「教室での対面授業」に換えた場合、期末試験の成績や授業評価アンケートの結果等がどのように変化するか検証していく。

